Program Note
楽曲紹介

モーツァルト：交響曲第31番ニ長調「パリ」K.297（300a）

私たちの「旅」も54回目。今回のプログラムは偶然にもヨーロッパの地を訪れる「旅」となりました。Journeyという単語がぴったりくる、長く困難な、でも充実した「旅」。そんな旅だからこそ、この解説が本日の「旅」のガイドとなれば幸いです。

ヴォルフガングは3度パリを訪問しています。3度目のパリ訪問は、父レオポルドの「パリに渡れ！」という手紙で始まります。この旅で母の死という辛い現実と向き合いますが、名作を多く生み出す転機となる旅にもなりました。この時作曲されたのが、交響曲第31番「パリ」です。

彼はコンセール・スピリテュエルという音楽会の主催者、ル・グロの依頼でこの交響曲を作曲します。ヴォルフガングはパリに渡る前にマンハイム(ドイツ)のオーケストラに接し、編成の大きさや音楽に影響を受け、この曲に反映させました。交響曲に初めてクラリネットを用いたり、木管楽器が2パートある「2管編成」での作曲など、その影響は様々なところに見られます。自身は「つまらない、人受けのいい曲」と言いながらも、彼の転機となる作品の一つとなります。

第1楽章は、当時流行していた「派手に始まり、派手に終わる」作曲の技法を用います。一息で、派手にニ長調の音階を全員で駆け上がります。自身の手紙の中にもある「変わった弓使い」など見所もあり、パリ滞在を「退屈だ」と言っていた割にはルンルン気分の滞在だったと感じさせる楽章です(シューベルトはニ長調の調性を「祝祭の歌」と称している)。

第2楽章は元々の版と、依頼人ル・グロが「冗長で難解」と難癖をつけて作曲させた別の版があります(この版はいくつかの録音で聴けます)。私たちが演奏するのは元々の「冗長で難解」な版。それは8分の6拍子で天使の戯れです。また、退屈そうに寝ている子は時々叩き起こされます。これも彼のユーモア。

メヌエットの楽章を省き、第3楽章に入ります。聞きどころは、ずばり3つ。1つ目は派手に始まることが通例だったところに、冒頭8小節だけヴァイオリンだけのパッセージを入れていたずらをします。ここで大活躍するのが第2バイオリン！彼は多くの曲中で2番バイオリンに多くの難題を突きつけますが、これも「旅」の醍醐味。2つ目は当時流行していたトルコの音楽を取り入れているところ。3つ目のフーガ(カエルの歌のような追っかけっこ)はヴォルフガングの十八番。

この曲の初演の後、彼はご機嫌で上等のアイスクリームを食べにいったという記録があります。私たちの「パリへの『旅』」を楽しんでくださり、帰りに上等のアイスクリームを食べていただければ、私たちにとって最上の幸せです。

（内山祥広）

楽器編成　フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

R.シュトラウス：アルプス交響曲 作品64

アルプス交響曲は1911～15年、40代後半になったR.シュトラウスが15歳のときの登山体験をもとに書いた曲です。少年時代に登ったのは標高1,800mほどのハイムガルテンという山で、富士山でいえば5合目よりも少し低いぐらいの高さだったようです。実際の体験では1泊したようですが、この曲のなかでは1日のうちに登山から下山まで終えています。

曲は22の章に分かれており、まだ夜のうちに登り始め、帰るときには夜を迎えているというシンメトリーなつくりになっています。

(1)夜。ゆっくりとした下降音型で始まり、静けさのなかで徐々に和音が変化していき、やがて初めてのffで**(2)日の出**を迎えます。輝かしい朝日を浴びたあと、低弦が**(3)登り**のテーマを意気揚々と強奏して山登りが始まります。

舞台裏から狩猟のホルンが遠く聞こえてきたあと、弦楽器のアルペジオとともに**(4)森へ立ち入って**いきます。さらさら流れる水を表現しつつ**(5)小川**のそばを歩いたあとはテンポが上がって急転直下、**(6)滝のほとり**に出ます。水しぶきとともに妖精のような**(7)幻が出現**したあと、美しく**(8)花咲く草原**や、のどかな**(9)山の牧場**を巡っていきます。まさに「アルプスの少女ハイジ」のような美しい描写で、牧場で鳴るカウベルの音が耳に残ります。

ここから少し苦労があります。**(10)道に迷ってやぶや茂みのなかへ**入り込み、**(11)氷河**の上を通り、転げ落ちそうなピチカートを伴って**(12)危険な瞬間**を迎えたりしながら、ついに**(13)頂上**に立ちます。オーボエの自由でゆったりとしたソロがとても印象的です。

その後すばらしい**(14)展望**を堪能していると**(15)霧が立ちのぼり**、あたりが**(16)徐々に暗く**なってきます。もの悲しい気持ちを表すように、弱音器を付けた弦楽器群によって**(17)哀歌(エレジー)**が奏でられたあと、**(18)嵐の前の静けさ**もつかの間、ティンパニによる雷が鳴ったのを合図にものすごい**(19)雷雨と嵐のなか、下山**が始まります。登りのときのテーマが逆行して演奏されることで必死に下山する様が描かれ、風鳴りを表現するウィンドマシーンも大活躍します。

嵐のあとはふたたび哀歌が現れ**(20)日没**を迎えます。別世界に連れていかれるような心奪われるパイプオルガンの音色とともに**(21)終幕**を迎え、冒頭と同じ下降音型のなかで**(22)夜**の帳が下りていきます。

じつはR.シュトラウスが交響曲を書いたのは10年ぶりでした。

1911年5月に「シュトラウスと私とは、同じ山の坑道を別々の側から掘っているのだ」と述べたマーラーが亡くなり、大きな喪失感を抱えていました。また時代も1914年に始まる第一次世界大戦に向かっていました。

そんななか、ニーチェの思想に共感を覚えていたR.シュトラウスは、ニーチェが著作のなかで山岳のことをキリスト教とは異なる“孤高”の象徴として記述していたこともちろん承知しており、アルプス交響曲を作った背景には「俗世から離れた自然」が頭にあったのかもしれません。

登山と下山によって構成されるこの曲からは人生の営みが感じられるとも言われています。マーラーが亡くなったあとも85歳まで長生きしたR.シュトラウスは、マーラーが活躍したウィーンの歌劇場の指揮者を務め、マーラーの交響曲なども指揮しました。登りのテーマを始めとして、前半に現れた主題があちこち姿を変えながら登場するこの曲は、大切なものを忘れないR.シュトラウスの“一貫性”も示しているのかもしれません。

このアルプス交響曲は希望曲として何度も挙げられながら、編成の大きさなどから実現できなかったのですが、本日願いが叶って演奏できることを団員一同嬉しく思っています。R.シュトラウスが描いた広大なパノラマをどうぞお楽しみください。

（米村昌幸）

楽器編成　フルート4（3番・4番はピッコロ持ち替え）、オーボエ3（3番はイングリッシュホルン持ち替え）、ヘッケルフォン、小クラリネット、クラリネット（3番はバス・クラリネットおよびコントラバス・クラリネット持ち替え）、ファゴット4（4番はコントラファゴット持ち替え）、ホルン16、トランペット4、トロンボーン4、チューバ2、ティンパニ2、バスドラム、カウベル、グロッケンシュピール、スネアドラム、タムタム、サンダーマシーン、トライアングル、ウィンドマシーン、ハープ2、チェレスタ、オルガン、弦五部